

新大学長にのぞむ

就任の決意に寄せて

はじめに
何らかの形で紛争を経験した大学は、いまや「大学改革」という新しい胎動のときを迎えた。その渦中であつて、同志社大学もまた例外でなく、新しい大学像をめざして各学部、各部所において改革試案が検討されている。

そうしたなかで、昭和四十三年三月、星名大学長の病氣退任以来、大学長不在のまま、代行および事務取扱いによる暫定措置を余儀なくされていた大学は、去る四月二十四日、第二次選挙で山本浩三法学部教授を第一候補者に選出、翌二十五日の法人理事会において新大学長に任命した。

昭和四十五年五月一日から昭和四十八年四月三十日までの三年間にわたる任期は、まさに大学の存亡が問われるときであり、学内においても困難な課題が山積している。新大学長の手腕に待つところ多大なるものがあるといえよう。

各方面の注目と期待を担った新大学長は、就任の決意を当日の新聞記者会見で次のように語った。

「大学は、国家権力はもちろん、いかなる政党、政治団体からも中立でなければならない。そのため大学の自治を守つてゆきたい。しかし大学自治の美名に隠れた犯罪は、絶対排除し、静かな学問の場としなければならぬと思う。大学改革案については、これまで学部単位でその一部がだされているが、全学的な立場で検討してゆきたい。各位の心からの御支援と御協力をお願いして止まない」。

〈山本学長略歴〉

- 大正十四年三月七日生
- 昭和二十四年 同志社大学法学部法律学科卒業
- 昭和二十五年 同志社大学法学部助手
- 昭和二十七年 同志社大学法学部専任講師
- 昭和三十年 同志社大学法学部助教授
- 昭和三十六年 同志社大学法学部教授（現在に至る）
- 昭和四十四年 同志社大学法学部長
- 同志社大学長事務取扱
- 昭和四十五年 同志社大学長（現在に至る）

適切な助言者とともに

岸田敏馬

昨年、山本先生が学内騒然とした時に、強い決意をもって困難な問題を次々に処理された手腕については敬服しておりました。この度の学長選挙により改めて大学長に就任されたことは、誠に喜ばしいことと思います。

しかし今日、大学の内外の問題は全く解決したのではなくむしろこれからがむつかしく、先生の前途は多事多難と思われれます。こんな時若き先生に学内からは勿論学外から寄せられる期待も大きいものがあります。

どうか、折角の御尽力が無にならないように健康に留意され、大いに活躍されますように祈ります。

求められるままに二、三の私見を申し述べますが、御参考のひとつにしていただければ幸甚に存じます。

一、今日の大学は、教育・研究・人事・経理等々学生問題にもすぐるむつかしい問題が山積していると思えますが、私はまず、校地内の環境を清らかで美しいものにしていただきたいと思えます。校門をくぐりますと立看板やビラが美しくべき建物、樹木まで覆っています。何かを訴えたいのではありません。訴えとして納得出来るものを正しく揭示してもらいたいのです。校門をくぐれば襟を正すような、環境をつくって

いただきたいと思います。

一、全教師、全職員、全学生にスポーツの奨励を願いたいと思えます。最近の学生は進学の為にはほとんどがスポーツから離れています。又入学してからもスポーツには親しみません。将来日本を背負う青年に、健全な身体を鍛えていただきたいのです。毎日二、三のスポーツの催しを教師・職員・学生も参加して行っていたきたい。場所は立派な競技場でもなくても御所でも加茂の河原でもいいと思えます。皆が面白く楽しく出来る様に御指導願いたい。そこにおのづから対話も生まれ、人格の陶冶も行なわれ、問題解決の糸口が生まれるものと思えます。

一、良き忠告者をもって、定期的にアドバイスを求められるように願います。色々と物事を処理される際、雑音が多く、困られる事が多いと思えます。特に学内には大先輩が多く、御腐心なさることでしよう。私の知っている大会社の社長が若くして就任されながらも非常に活躍されたその裏には、その社長を育てたいと願う財界の大先輩から、毎月定期的に率直な忠告があったということです。先生もどうか、そうした、いい忠告者グループをもって、少なくとも月一回いろいろと御意見をお求めになってください。

これらの人は必ず陰に日向に先生を後援され、御活躍におしめない助力をなさるにちがいないと思えます。

最後に、新島先生が同志社を創立され、開校後も学内の問題を処理された御苦心を想起され、あの大学設立趣意書や新

鳥書簡集に見られる、烈々とした気迫と同じ心で、新島精神を現代に具現し、同志社の歴史に輝やかしい一頁を飾っていただきたく祈って止みません。

(関西テレビ放送常務取締役・同志社評議員)

研究施設の整備を

高橋 悠

同志社大学のことをあらためて考えるとき、まず、うかがふことは「大きくなった」という感慨である。私は同志社のすぐ近くで育ったので、戦前、戦後を通じてかなり長い間この学校の姿を見て来ているが、戦後間もなく大学を卒業する頃まで、それはいくつかの赤い煉瓦と木造の古い建物が立ち並び、こじんまりとしたキャンパスを持つ学校であった。その後直後に明徳館の建築が始まった。いまではすでに大学の主要な大きい建物の中で、もっとも古いものになってしまったが、当時その姿は同志社大学の新しいいぶきの象徴と言っても過言ではないほどの強い印象を人々に与えていた。とくに新研究室への移転が行なわれたときの新鮮な気分は、いまでもすぐ思い出すことができる。それは新しい設備が研究への意欲にどれほど大きな影響を与えるものであるか、ということを確認する出来事であった。ところがその後の大学の急激な膨張は、研究室からその安定性を奪い、人員と書物との増加

につれてそれは次第に狭く、不便なものになって行った。このような状態に置かれつつあった研究室を一時離れて、外国のいくつかの大学および研究機関において学ぶ機会を得た私は、自分の属している研究室の構造そのものについても大きな疑問を持つようになった。それは書庫と閲覧室とに関する問題である。私が見た研究施設ではこの二つのものを中心として、大抵は開架式の書庫に入って書物を探し、閲覧室で静かにそれを読むことを楽しめるような雰囲気の設定されていた。同志社に帰って来て、この二つのものがほとんど無いに等しい研究室の中に個室が整然と並んでいるのを見て異様な感じを受けたことを思い出す。このような基本的構造上の欠点を意識して、何とかならないものかと思っているときに突然、私がそこで研究をさせてもらった大学の教授が来日し、京都でその人を案内しているうちに、同志社の研究室を見せてほしいと言い出したのには弱った。専門が違うので一度挨拶をしたことがある程度の人であったからあまり細かい事情を話すわけにも行かず、冷汗の出る思いをしたが、相手はさすがに経験を積んだ老教授で、研究室の入口を見てすべてを察したのであるうか、中を見せろとは言わずに黙っていた。しかし翌日見送りに行ったときその人は「早く学長に適切な措置を執るように要求することがあなたの義務である」と言い残して帰って行った。その後、前学長および当時の部長の方々のご配慮によって、私たちの研究室の状態もかなり改善されたが、それはまだ応急措置の段階を出ていないのであ

る。いうまでもなく大学の教育は、大学が研究機関としての機能を果たし得ることを基礎としている。研究設備が十分でないということは、教室が足りないということと同程度に重要な意味を持つと私は思っている。講義と学生の指導という仕事を支え、それらを有効なものとするためには、すぐれた研究・読書室が必要である。率直に言って、大学の拡張からややとり残されたような印象を受ける、研究施設の整備を私は新学長に望みたい。詳しいことは私にはわからないが、前学長時代にくらべて経済的条件が悪化しつつあることは承知している。したがって、全面的に新しい設備のみを要求しようとは思わない。現状を改善する工夫をも望みたい。これに関してまず基本的な重要なことは、その方向に沿って努力を集中し、積み重ね、同志社大学の研究機関としての地位を確立しようとする決意を大学の全構成員が持つことである。このような意識の醸成の促進を、私は何よりもまず新学長に期待している。同期の卒業生である学長も私も同様な経験をされており、研究設備の充実に対する並々ならぬ熱意を持っておられることと思う。その実現のために力強い指導力を発揮され、同志社大学が、このような不均衡によって、いわば栄養失調の状態に陥るのを防がれることを心から願っている。

(同志社大学法学部教授)

勇敢な実行力をもって

大 宮 隆

山本新学長のお歳をうかがい、私よりはるかにお若いのに驚くともにもまことに頼もしい思いがいたしました。

理想を追うの余りに実行するところが極めて少ないということではなく、理想に近づくために、およそ程遠い廻り道であらうとも、また次の道であらうとも、実行できることから着実に歩を進めていただくようお願いする次第です。

学長というものは、何事につけても教師全員の、完全な意見の一致を求めることはできませんので、その最大公約数を勇敢に、精力的にご実行願いたいと思います。よその学校で最近の実状をみるに、決定したことに對しては、たとえ自分の意見と違っても、これを支持しなければならぬ位の常識はわかりそうなことであるのに、自分だけはよい子になりたいのか、うしろからさかんに足を引張るような言動がみられ、我々実業界にある者は、判断に苦しむ次第であります。わが同志社にそのようなことのないように、新学長が存分活躍できるよう強力な教授会のご支援をもご期待いたします。

(宝酒造株式会社社長・同志社評議員)

同志社精神を人間教育の基礎に

園 四 郎

全国的に荒れた大学紛争は一面、今日の社会に対応しきれない幾多の問題を大学が包蔵していたことを社会に提起したものであり、真に新しい大学の在り方を国民全般に認識させたものであることは言うまでもない。

今や、経済の発展と共に社会が高度に技術化し、社会構造や生活構造の大きく変化している時期に際して、新しい大学としての教育制度は如何にあるべきか、大学の社会に果すべき役割は何か、更には同志社として個性と特色のある大学を如何に作って行くか、という一大転換期に遭遇しているものと考える。私は山本学長のご就任にあたり次の三つのことを申しあげたい。

(一)、大学が自らの学部に関じこもることなく、また批判や理念のみでなく、学部相互間の意見を統一し、その協力により総合大学としての学部の交流、学科目選択の自由などの基本構想をたて、改革を推進していただきたい。

近代化の遅れたわが国では、大学が人材養成上に果してきた役割は極めて大きい。高度化して行く社会の中で、現代の文明や社会の方向は我々にとって何を意味しているか、今こそ考えるべき大切なときである。大学は社会的有用性と学問の探求即ち新しい価値の創造という二つの命題をもっている

が、大学教育は単に知識を伝達するということのみではなく、個人の能力を引出し、人間性豊かな大学生を育成することに配慮がおかれるべきである。

(二)、同志社大学においては、人間教育・生涯教育を目標とする大学として「たゞ技術や才能ある人物を教育するに止らず、いわゆる良心を手腕に運用する人物を送り出すことにつとめてきたのである……」との、新島精神をより深く再吟味して、教授と学生、学生相互間においては自然に人間と人間との魂のふれ合いが行なわれ、感性、情緒、心理などの人間的要素を磨きあげ、幅広い良心の全身に充滿する人材を育成するべきである。

学生を安心して委ねることのできる大学としての社会的信頼を確保することを同志社大学の使命とされたのである。

(三)、次代を背負う社会人として、同志社大学に入学する以上、高度の教養、創造力、反省を伴った批判力を養う学園生活の中で、社会の一員として自己再見し、自己修練の厳しさを体得できるように、学風の刷新とその確立を図られたい。大学においての学問研究は歴史学であれ、法律学であれ、自由な「もの感じ方」を会得する場であり、日進月歩より秒進分歩の実力主義中心の社会において、人間としての生甲斐、幸福を真剣に考え、社会人として必要な思考力、適応力、創造力、強い意思、行動力を持つ可能性の基礎を修得する場も大学であるとの自覚を深く浸透される教育の実現を願ってやまない。

(株式会社京都ホテル常務・同志社評議員)